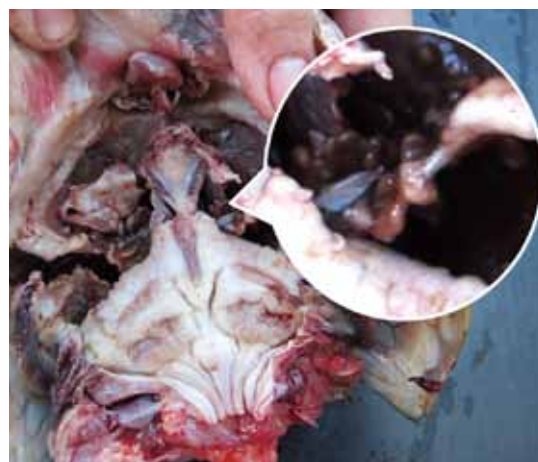


カムルチー

佐藤拓也



↑ 図2. カムルチーの鰓蓋内部(腹面)と上鰓器官(丸枠内)

← 図1. 水面にたたずむカムルチー

静岡市を流れる巴川の上流には麻機遊水地という沼地があります。桜の季節が過ぎて、いよいよ春も盛りという日差しが降りる頃、遊水地の水辺にはたくさんの生き物たちが姿を現します。陽気の良い日にはコイが集まるような浅瀬に目を向けて見ましょう。コイたちに混じって、ニョロリと動く太いへびのような魚を見ることができると思います。この魚はカムルチー *Channa argus* (図1)という中国東部、朝鮮半島、ロシア南東部を原産とする大型(60-100cm)の肉食魚で、日本ではライギョという名前の方が一般的かもしれません。日本に生息するものは、戦後の食糧難対策として朝鮮半島から持ち込まれた個体が起源とされていますが、他にも数説あり、由来が定かではないようです。今では日本全国の平野部に存在する水域のほとんどに生息しており、大量発生による漁業被害や在来種の食害を懸念して駆除が試みられた時期もありました。

本種が日本各地に分布を広げることができた理由は多数ありますが、大きな要因の一つとして空気呼吸ができるということがあげられます。ふつう魚類には水中で呼吸する為に鰓が備わっていますが、本種の鰓はとて小さく、それが収まるはずの空間には上鰓器官と呼ばれる特殊な呼吸器官が付属しています(図2)。この上鰓器官は別名『迷路器官』とも呼ばれ、板状の基質が迷路のように入り組んで複雑な形となっています。基質の表面は酸素を直接取り込む為の粘膜組織によって覆われており、これが湿ってさえいれば呼吸ができるのです。このため本種は、水中への酸素の供給が少なくても、普通の魚には劣悪とされる水域でも生き延びることができ、増水時には田んぼの畔程度ならば這って移動してしまいます。台湾やタイに生息する近縁種ドワーフスネークヘッド *C. gachua*などは、陸上をピョンピョンとカエルの様に跳ねて移動することも知られています。

このように本種は、生存能力と分布拡大能力を有しており、ナマズ以外には大きな肉食魚の居ない日本の淡水域では最強の外来種と言えるでしょう。しかし、現在でも際限なく増殖しているのかといえば、そうではありません。冒頭で本種の駆除について言及しましたが、現在このような活動はほとんど行われていないのです。なぜなら駆除活動が本格化する前に、目に見えて減少してしまったからです。その理由はよくわかっていません。本種の原産地における生息環境は、雨季に氾濫する田んぼや溜池が多く存在する平地で、農耕中心だった頃の日本と相違ありません。本種は産卵する為に流速が緩やかで、水生植物が豊富な場所を必要とします。本質的な生態に目を向ければ、環境の悪化で減少していると言われる日本固有の魚たちの生息環境とほとんど違いがないのです。外来生物による捕食などの問題は、悪として決めつけられやすい面も持ち合わせています。生物間の競争関係以前に、まずあらゆる生物にとって生息の基盤となるべき自然な水域自体が失われつつあることを考えなければなりません。